

楊 夢 (ヨウ ユメ)

中国出身

日本女子大学 家政学研究科児童学専攻 修士課程

歌舞伎鑑賞教室:日本文芸の学び

先日、奨学財団の行事で、一緒に歌舞伎を見に行った。前はずっとオンラインであったりメールで交流したりしているが、対面で会うことは一度もなかった。かつ、以前日本語学校で日本の文化や芸術についていろいろ教えてもらったが、劇場に行って歌舞伎を見るのはじめてなので、前日からわくわくして、深夜までゴロゴロ眠れなかった。やっと朝になって、そのわくわく感を持って劇場に向かって、入場した後皆さんにあって、少し挨拶ができて、あっという間に上演の時間になった。

「さあ、いよいよ！」私はパンフレットを読むことも忘れて、最初のみかたの解説に引き込まれた。舞台の紹介、歌舞伎の BGM など、ミニ芝居のかたちで生き生きと解説された。「あっそんなに難しい演劇じゃないかも、私も理解できるかも！」と思った私は、少し自信を持てるようになって、解説の足跡に即して今日の正編に入った。

正編は『人情噺文七元結』だった。お人よしの長兵衛は賭けごとに夢中になったため、家族大きな借金を負った。娘のお久は親孝行したいという強い願望に駆使され、一人で吉原の角海老に行って、角海老の女将に代わりに借金を返してもらえたら、ここで一生でも働くことを願った。女将はその孝行心に感動されて、長兵衛を呼んできてお金を渡して来年まで返す約

束をした。しかし帰る途中、お金が盗まれて自ら命を絶えようとしている文七に出会って、命を救うために、この借りてもらったお金を文七にあげた。その後、文七の雇い主は彼を連れてきて、娘もお金も返しに来て、文七とお久の結婚も定められた。

なんとリアルで生活感のある演出だ！夫婦喧嘩の場面や娘の孝行心、危難に陥る人の対する義気など、出演者の生き生きの演出の中、まるで現代社会、周りで起こっている場面のようには実感を与えられた。しかも、こんな意味深く感動的な物語であっても、観劇者の感情にあまり思い負担を与えず、時々ユーモアの表現で笑わせたりしているとすごく感じていた。歌舞伎自身は私のような外国人に対するそれなりの深さ、渋さがあると思うが、「教室」で「聴講」によって、わりと易く理解できた。

私は以前常に、このような文芸に好奇心を持っていたが、畏敬心もあったので、あまり深く分かっていなかった。今回の鑑賞教室をきっかけに、これから少しずつ学びようと思った。



以上